

特 集 No. 1

コモンズとシェアリング

井澤 知旦

社会の変曲点とキーワード

今は時代の転換期なのか、新しい言葉が飛び交っている。「加速」や「実装」はその例となるうか。進化する技術と技術が融合した世界はあらゆる事象の変化を加速したり、またそれら技術を社会実装して変革を促すことが言葉の意味するところである。最新の言葉ではないが、改めて今注目されているのが「コモンズ」と「シェアリング」である。共通する概念は「共有」である。

古くて新しい「コモンズ」

「コモンズ」は資源の共同利用地をさし、従来それは、地域社会における生活の豊かさを増進していく場であったが、最近では地球的規模で資源の有効性に着目して共有管理していく

視点が加味されてきた。経済学では「コモンズの悲劇（一九六八）」が有名で、コモンズの自由下において自己の利益の最大化を突き進んでいくと全員に破壊をもたらすというものである。それに対し、公共広場は社会関係資本や信頼を生み出す場であり、参加者が多いほど楽しみも多いとする「コモンズの喜劇（一九八六）」が登場し、私利よりもコミュニティの利益を、各自の当面の境遇よりも共有資源の長期保全を優先する「コモンズの統治（一九九〇）」が打ち出されている。これらは地域社会における位置づけである。他方で、地球環境の限界の範囲内に人間の社会経済活動を限定する「ドーナツ経済（二〇一七）」が登場している。これは社会的生活を支える下限と環境的な上限の幅の中で環境再生的で分配的な経済活動を展開するもので、その実装の一つが「サーキュラーエコノミー（二〇一五）」なのである。

ネット活用によるシェアリング経済

今日ではネット、特にスマートフォンでの情報交換はあたり前になり、それを前提としてハードもソフトも所々から利用に変化してきている。その典型が移動分野でのカーシェアやバイクシェアであり、資金でのシェアはクラウドファンディング（CF）である。このようなシェアリング経済は急

速に拡大している。その市場規模は二〇二〇年二兆円から二〇三〇年に十兆円に拡大すると予想されている。このシェアリング経済の発展が協働型コモンズを拡大していくとの指摘がある。例えば、楽曲創作においてボカロPが作詞作曲して、YouTubeで当該楽曲に相応しいボーカリストと背景アニメーションの作家を探し、Twitterで交渉、完成作品をYouTubeで発表するというプロセスでは、YouTube等が協働型コモンズになっている。またそれは情報系コモンズでもある。

現場系コモンズはどこにある

情報空間でなく現場空間でのコモンズとは何か？日本のコモンズと言えば「入会地」があげられるが、限定的すぎる。今日的には公共空間（道路・公園・河川敷等）や公共施設（図書館や文化会館等）はパブリックであってコモンズではないが、運営方法によっては広義のコモンズとして解釈できないか。さらに民間敷地での公開空地やアーケードのある商店街、コミュニティへ開放された民間施設はコモンズの範疇に入る。大型商業施設では地域コミュニティに向けて健康増進のために、早朝にラジオ体操の場や営業時間内に歩け歩け運動のコースに貸し出したり、買物移動の困難な人のためにエリア巡回バスを運行したりし

ている。いわばコミュニティセンター機能を発揮している。最新のイオンモール Nagoya Notirake Garden は、企業博物館ノリタケの森と一体化して芝生広場（煙突広場）が象徴ようになって、全体イメージがコモンズとなっている。

コモンズとまちづくり

このように公共空間・施設の開放と民間施設（商業・オフィス・大学等）のコミュニティへの開放とともに、コミュニティレベルで諸団体が結集して、それらの管理運営に主体的に取り組んでいくことが、多様な場所でコモンズを生み出す力となる。いわばエリアアマネジメントができる地域力が求められる。このようなコモンズの量と質が私たちの生活の質向上に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

